参加型の総合文芸誌

あとらす

ATLAS

門戸開放。内容厳選。いつでも誰でも自由に参加できる「文芸の場」へようこそ。

2026

No.53

あとらす ATLAS

No.53

2026

【投稿による総合文芸誌】

参加自由。内容精選。

西田書店

参加型の総合文芸誌

あとらす
ATLAS

2026
No.53

西田書店

あとらす53号　目次

神社仏閣、名所旧跡は素通り―地理作家、堀淳一先生と歩く……熊谷文雄　5
ある満州孤児の回顧録　撫順の朝顔……中西淳博　9
時間の壁―戻れない過去への旅……井上湧水　22
万葉集（よろずのことのはをあつむ）を訪ねて（その7）……岩井希文　41
八幡浜駅で下車して……岩井富美恵　52
自由詩三題……水渡　朔　58
〔俳句〕桜草……山根タカ子　64
〔短歌〕幼子（おさなご）……小川十四　66

漢詩に詠む海外の旅（其の二）……玉理　竹中淑子　68
漢詩の世界――日本の漢詩（第六回）……桑名靖生　91
徳川慶喜と西郷隆盛の「死」……恩田統夫　123
カタルーニャの今・二〇二五年九月三十日……岡田多喜男　155
古代都市アレクサンドリアの哲学……栃原　裕　167
ワ州基本法の研究――中国法との比較を通じて――（10）
軍人管理法・出入境管理法・土地管理法……安田峰俊・高橋孝治　181
戦後アメリカの日本統治と日本の伝統文化の行方
ジョセフ・ナイ氏の「ソフト・パワー」論を中心に……村井睦男　195
〔コラム〕大津港一4／斉田睦子167／根本欣司210

神社仏閣、名所旧跡は素通り

地理作家、堀淳一先生と歩く

熊谷文雄

「地図を見ていると、いろんなことが想像できる。でも、頭の中だけで考えることにはやはり限界がある。だから、現地に行ってみると、思いがけない発見をすることがある。これは一種の探検で、地図は探検への好奇心をかき立ててくれる存在……」

以上は物理学者であり、地理学者である堀淳一先生の言葉である。

堀淳一先生の地図の楽しみ方は独創性に富んでいて、今はすっかり定着した鉄道の廃線歩きも、先生が先駆者で、地図を眺めて、現地のイメージを膨らませ、行きたいところを見つけ出し、実際に歩いてみるのが先生の流儀だった。

先生は、旧道・廃道、水道や産業遺産などの探検はもちろん、アイヌ語地名を歩いたり、水源探しをしたり、そういう紀行家、旅行家である。

先生は理論物理学者であり、エッセイストでもあり、特に紀行記などいくつかの地理に関連した著作を残しているが、他界されてから八年が経過した。

私は縁があって、先生の紀行文の裏付けとなる徒歩旅行に三回同行することができた。

堀淳一先生について、地図研究家の今尾恵介氏は以下のように語っている。

「国土地理院の地形図には一瞬で引き込まれ、また、母がそんな私にぴったりの本を書店で見つけ、買ってきたのが堀さんの『地図のたのしみ』だった。失礼ながらこれほど自分と似た趣味の人が存在することに驚いた。周囲に鉄道マニアはいても、地図にふける友人は皆無だったからである」

堀淳一先生について、私は最近の若い人に聞いてみたら、名前を知らない、という返事が多かったが、知っている人もいた。

続きは『あとらす』で

時間の壁
戻れない過去への旅

井上湧水

まえがき

無人島に漂流してゼロから生活をスタートしたロビンソン・クルーソーの物語は物に溢れた現代の生活から見ると妙にロマンを感じさせる。

現代の生活に疲れた人間は一度リセットして振り出しから再スタートして見たいと思うことがある。

また古代の何もない原始状態から生活を始めて見たいと思うこともある。

そして歴史をさかのぼって過去の人間と交流して見たいと思った人間がいてもおかしくない。

そこには飾りばかりが多い、現代の人間が忘れ去った人間の原点があるのである。

1話　海難事故

太平洋戦争末期の昭和19年8月◇日。

海軍中尉、山本五郎が東京湾とその海岸地帯の哨戒飛行をしていた。

上空より海岸を哨戒して居た時、海難事故を目撃した。その船は転覆して、誰かが助けを求めていた。

飛行艇であるので元来海にも着水可能である。すぐさま着水して救助を試みた。

その者はかなり疲れきった様子で転覆して上になった船底にしがみついていた。まだ体力は残っている様子である。

五郎は手をさしのべ飛行艇に抱き上げた。抱き上げた際、妙な感じがした。体の感触が異なるのだ。小麦色の皮膚をしていて、長い黒髪を後ろで束ねている。救助した漁師は意外にも男ではなく年若い女であった。まだ少女の面影を残している。

飛行艇に助け上げると疲労でぐったりして口も聞けない程弱っていた。頬をたたいたが殆ど反応がない。彼は心臓に耳をあて心音を聞いた。かなり弱っていた。

2話　救命措置

顔面蒼白になっていた。意識もなかった。長い間海中にいたため体温が下がっている。心音がじょじょに消え危険な状態であった。

彼は心臓マッサージを試みようとした。しかし服のボタン

続きは『あとらす』で

漢詩の世界
――日本の漢詩（第六回）

桑名靖生

江戸後期　幕末から明治維新

西郷隆盛

文政十年（一八二八）～明治十年（一八七七）通称を吉之助と言い、号は南洲。薩摩藩下級武士の子として生まれた。年少から読書を好み、藩の学聖塾に学ぶ。十八歳で郡方書役助に就く。陽明学を学び、知行合一の精神（知識と行動は一体でなければならない）を養い、参禅して修養に努めた。

二十八歳の時、藩主島津斉彬に見出され、中小姓に抜擢され主君の篤い信頼を受けるようになり、藩主の江戸出府に従って、江戸薩摩藩屋敷に勤務する。水戸藩、藤田東湖を訪ね、勤王の志を強く抱くようになる。

島津斉彬は当時最も開明的な藩主の一人で、幕府の改革を推進、徳川慶喜を擁立しようと水戸藩主徳川斉昭、越前藩主松平春嶽と協力、努力していた。そのために、隆盛は江戸詰めのお目付け役庭方役を命ぜられ、春嶽の家臣、勤王家の梅田雲濵、橋本左内とともに尊王攘夷活動に奔走した。

しかし、隆盛にとって不幸な事態が訪れる。島津斉彬の突然の死（毒殺されたという説もある）である。斉彬の異腹の弟（父忠興の側室お由羅の子）久光の子の忠義が新藩主となるが、藩政の実権は久光が握っていた。

久光と隆盛は肌が合わないというか、共に双方で嫌い合っていた。しかし薩摩藩での「お目付け役庭方役」とは一種の外交官であり、隆盛はこの時流に対処するに必要な人材であった。

久光により、隆盛は奄美大島と沖永良部島へ、二度の遠島（島流）に処せられているが、隆盛が呼び戻されずにはいられないような時代の趨勢だった。すなわち、元治元年（一八六四）二月、天下の形勢の変動に、久光は隆盛に赦免召喚の藩命を伝える。隆盛三十八歳の時である。

帰藩した隆盛は軍賦役に任ぜられて上京。明治維新までの四年間、最も目覚ましい活躍を続けることになる。時代はすでに公武合体の時勢ではなくなり、尊王倒幕の機運が熟していた。

一八六七年、徳川慶喜による大政奉還、王政復古の大号令により、幕府軍は敗走（鳥羽伏見の戦い）、大坂から慶喜は

続きは『あとらす』で

徳川慶喜と西郷隆盛の「死」

恩田統夫

目　次

（はじめに）
Ⅰ．徳川慶喜の「死」
一．「政治的死」に至る慶喜の生涯
二．慶喜の政治家としての重要な決断
Ⅱ．西郷隆盛の「死」
一．「自決」に至る西郷の生涯
二．西郷の政治家としての重要な決断
Ⅲ．慶喜と西郷の「対峙」と二人の「死」の意義
一．慶喜と西郷、京で「対峙」の五年
二．二人の「人となり」、共通点と違う点
三．二人は夫々二つの「死」をどう見ていたか
（おわりに）

（はじめに）

徳川慶喜と西郷隆盛は幕末・維新史を通じて幕府と反幕府勢力の夫々を代表する人物であった。それだけに二人の死、「慶喜の政治的死と西郷の自決」は明治維新を大きく動かす契機となった。明治維新をペリー来航に始まり西南戦争で終結する二五年に亘る民族革命であったと捉えるのが私の理解である。この観点からすれば、この二五年にも及ぶ長い民族革命は「孝明天皇の死」をも含めたこの「三つの死」で画期できる「三幕構成の劇」に喩えられる。

第一幕は「開国とナショナリズムの開花」篇。一八五三年のペリーの浦賀来航で始まった活発な国内の開国論議は、将軍継嗣問題も絡み長く激しい複雑な政治的混乱を引き起こした。だが、一八六七年攘夷派のシンボル「孝明天皇」の突然の死によって攘夷論は鎮静化した。所詮、攘夷は列強との実力差を知る武士にとって本意ではなく政争の具に過ぎなかったのだ。だが、この攘夷運動は国民に初めて「外国に対する日本」という民族意識をもたせた日本人の最初のナショナリ

続きは『あとらす』で

古代都市アレクサンドリアの哲学

栃原　裕

1．ヘレニズム

地中海沿岸ナイル川河口の都市であるアレクサンドリアは、前３３４年から始まるアレクサンダー大王の東方遠征の時代、遠征各地にギリシャ人を入植させ都市を建設し、その都市を全てアレクサンドリアと名付けた70か所の内の一つである。

この地中海交易の最大の交易拠点都市であるアレクサンドリアを語る前に、アレクサンドリアを生みだしたヘレニズムについて先ず述べなければならない。

前３３４年、アレクサンダー大王は、ギリシャ各都市の「コリントス同盟」の全将軍という名目でギリシャ同盟軍を動員し東方遠征に出発した。最初に大国ペルシャを打ち破り、エジプト、メソポタミヤ、シリア、バクトリア、アナトリアを征服し7年ほどかけて西アジアのほぼ全域を支配する大帝国を築き上げた。ヘレニズム国家の交易ネットワークは、地中海全域からインドまで広がっていた。この前３００年代前半からローマ帝国に敗れるまでの前1世紀後半までの約３００年間の時代をヘレニズム時代という。ヘレニズムという言葉は、語源的には「ヘブライ語法混じりのギリシャ語」という意味である。ギリシャ文明とオリエント文明の合流の時代である。ギリシャ時代とローマ時代の狭間にギリシャ文化とオリエント文化を合流させた文化圏がヘレニズムである。なお、このヘレニズムを築いたアレクサンダー大王の少年期のマケドニア宮廷での教育係は、あのギリシャの大哲学者アリストテレスであることも述べておかなければならない。

2．三つの分裂したヘレニズム国家

アレクサンダー大王は、インドのインダス川流域まで軍を進めるが、インド・パンジャーブ地方の首長ポロスの率いるインド諸侯軍の６００頭の戦象を駆使した抗戦に悩まされアレクサンダー軍の損害も多く、兵士達のそれ以上進軍しないようにという懇願に会い、インダス川から撤退し西方への帰路に就くことになった。バビロンに戻ったアレクサンダー大王は前３２３年、熱病にかかり32歳で死去した。

彼の死後、デイアドコイ（後継者たち）と呼ばれる将軍たちの争いによって最終的には三つのギリシャ人国家に分裂した。この三つの国は「ヘレニズム三国」と呼ばれ、三分裂後もギリシャを中心とする地中海沿岸の地域からオリエント地

続きは『あとらす』で

9784888667104

ISBN978-4-88866-710-4
C0095 ¥1100E

1920095011004

定価（本体1,100円＋税）

西田書店

エッセイ
熊谷文雄／岡田多喜男
紀行
岩井富美恵／岩井希文
小説
中西淳博／井上湧水
詩
水渡朔
俳句
山根タカ子
短歌
小川十四
漢詩
桑名靖生／竹中淑子
評論
村井睦男／安田峰俊／高橋孝治／栃原裕
歴史
恩田統夫

［投稿についてのお問い合せ］
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 2-10-31 IWビル 4F
Phone：03-3261-4509　Fax：03-3262-4643　e-mail：info@nishida-shoten.co.jp
西田書店「あとらす」編集室